

仮名表記再考

兵 藤 守 男

1. 表音文字としての仮名、特にカタカナの可能性を考察する。複数の事例や論点を扱うため、叙述が羅列になる点を予めお断りする⁽¹⁾。また、表音に関して、言語音の物理的・知覚的側面に着目した言語音である音声（音韻）と言葉の意味の弁別に関わる言語音の機能面（話者の認識）に着目した言語音である音素（音声上異なる音を異音（allophone）として含む）とを区別する慣例⁽²⁾に従い、音声（記号）は角かっこ（[]）で、音素（記号）は斜線（//）で表記する。

仮名表記の問題では当然ながら言語学界・教育学界の議論を優先することが正道であるが、仮名遣いは国語政策の問題でもあり、また政治学や西欧政治史を担当する者には、外国の人名や地名に加え、システムやアイデンティティなど漢語・和語に適切な「翻訳語」がない外国語・外来語の使用が多く、どのようなカタカナ表記を充てるかは、切実で扱いづらく、他の学問分野や新聞・放送・出版の業界の方々にも共通する職業生活上の悩ましい問題だろう。この苦労の根本は彼我の音韻体系の差にある。英語由来の外来語に限っても、表記の苦労は一通りではない。音声よりも通常少ない音素の数の数え方は色々あるが、標準日本語の5母音＝5文字表記では多くの原音の母音に忠実な表記はできない。子音は一層難しい。但し、原音に近い母音や子音がないこと、あるいは対応しうる表音文字がないことと原音を表記出来ないこととは別問題である。特定のカタカナに何らかの工夫を施して原音を表すという約束事を設ければ、表記は可能だからである。その際、標準のカナ表記との乖離をできるだけ小さくすること

は自然であり、理に適っている。仮名は、ハングルのように、1つの文字を子音部分と母音部分に分けられないため、新たな発音表記を作ろうとすると、工夫しなければ新しい文字が相当に増える。そこで二重文字(digraph)を活用して対応が図られる。明治時代の小説家齊藤緑雨の作とされる「ギョエテとは、俺のことかとゲーテいい」という川柳は、この種の話題では定番だろう。ドイツ語既習者なら、第1音節「Goe」の「Oウムラウト」の音を、「ギョエテ」ではなく「ゴエテ」とでも書くのだろう（尤もOウムラウトは円唇前舌中央母音だから口蓋化してギョのように聞こえて拗音表記を充てたかも知れない）が、どのカタカナを充てても標準日本語には原音に近い音がないために（後述するように、この事例の場合は名古屋市方言の「oi」という連母音がほぼ該当する）表記には無理が生じる。

原音尊重の問題は日本語の外来語表記に限らない。同じアルファベット文字を用いる英仏独の3カ国語に限っても、3つの言語間の処理には工夫と苦労がある。確かに英語圏の人が仏語の(garçon)の「ç」や独語の(Fußball)「ß」という見知らぬ文字に出遭っても、その表音(各々[s]に該当)を知れば発音は概ね可能であり、また仏語圏や独語圏の人にとって綴りと発音との対応関係が複雑な英単語(「歴史的仮名遣」を守っているのだろうが、これだけ対応関係が複雑だと失読症も多くなるのだろう)もその発音を知り、自国語に対応する発音があれば問題ない。しかし、仏語のcœurの「œ」や独語のfüllenの「ü」の場合には、英語には存在しないか一部の方言のみに存在する音声(各々[œ]、[y])であるため、原音再現には苦労する。weekendは、仏語圏では外来語としてではなく、外国語として原音に近く発音される。同じ文字を用いても発音が相当異なる「r」のような例もある。仏語圏でヒトラー[hitrle]が[itle]と発音されるのは表記を自国語読みするからであり、ジャンヌダルク(Jeanne d'Arc)の場合、英語にはJeanneに対応する単語Joanがあり、また「d」は「of」に「翻訳」された結果、Joan of Arcとなる。このように複数の対応があっ

て、原音重視が唯一の原則ではない。

カタカナによる外来語表記で原音に近づける方針も標準日本語の音声・音素在庫の範囲での最大努力が基本である。各分野の専門家は原語の発音を知り、カタカナ表記の中でその再現を図ろうとするが、その苦勞の産物も、標準日本語の音韻体系に組み込まれて日本語風に発音されることは自然の成り行きだろう。近年の流行歌のように、日本語の歌詞の中に原語に近い音で英単語が発音されれば、違和感が残る（そのバタ臭さも当然ながら織り込み済みである）。しかし、日本語の音韻史をみれば、音声の数と種類が相当変化してきたことは周知であり、日本語の音声・音素の数や種類は、今後も発音の市場動向によって決まる。

外国語や外来語の表記を考える上で、原音重視の他にもいくつかの指針がある。例えば、「ヨーロッパ」を現代の国際語といってい英語の発音 [j'ʊ(ə)rəp] に近づけた「ユアラプ」へと表記を変更することにさほどの利便はない。「ヨーロッパ」の新しいカタカナ表記のモデルに英語を選択する理由への疑問よりも、そもそも混乱が大きい。時の効力（時効）あるいは慣用は無視できない。ただ、従来 of 表記の見直しを積極的に否定する理由もなく、表記には一定以上の一貫性や体系性が必要であるとの主張にも説得力がある（Hepburn が、ヘボン式ローマ字考案者ではヘボンとなり、女優ではヘップバーンと表記されるのには何か特段の事情があるのだろう）。

原音重視、慣用尊重、合理主義を前提に、仮名遣い、とりわけ外来語の表記に関しては、文部（科学）省・国語審議会や放送界を初めとして、見直しの議論が繰り返されてきた。戦後の仮名表記では、歴史的仮名遣から現代かなづかいへの改定（1946年、内閣公示第33号）、現代かなづかいから現代仮名遣い（かなづかいを漢字表記していることから歴史的仮名遣への回帰が伺える）への改定（1986年、内閣公示第1号）がある。こうした改定は、仮名表記の限界を前提に、語用の動向に配慮しながら、日本語表記の体系性を維持するために日本語の乱れを制御しようとする見直し

作業であり、その中には仮名表記の新たな認定や模索が含まれている。

2. 表音文字としての仮名は音節文字（表音節文字）である点に第1の特色がある。言語表記の文字体系（glottographic）は一般に表音文字と表語文字に分けられ、表音文字はさらに（ハングルのような子音や母音が弁別される）素性文字、（アルファベットのようない）音素文字、そして（仮名のような）音節文字に分けられる。ただ、「濁点は濁音を示すための符号であって、仮名という文字の一部ではない。従って、仮名に限らず、濁音に読む漢字にも濁点を加えた例があ」⁽³⁾り、濁点記法は有声音という弁別素性を持つことから、そこに着目すると仮名は素性文字としての側面も有する。

日本語は、オーストロネシア語族の諸言語などを除けば、意味の違いをもたらす音素の数が少ない。数え方は学者により色々あるが、一般には、5母音⁽⁴⁾、16子音⁽⁵⁾、/N/、/Q/、/R/の24音素である⁽⁶⁾。最後の3つは特殊音素と呼ばれる。/N/は撥音「ん」を表す。「『さんまい』の『ん』は[m]音で唇を閉じている。『さんだい』の『ん』は[n]音で、唇を開け、閉鎖している舌尖が歯茎にある。『さんがい』の『ん』は[n̠]音で、唇を開け、閉鎖している舌の奥が盛り上がり上あごについている。また、『さんにん』の『ん』は、[n̠]よりもべつとりと上あごにつく範囲が広い。『さんえん』の『ん』はどちらも舌がどこにもつかない」⁽⁷⁾。撥音はこれ以外にも鼻母音としての音価も持つが、いずれも同じ音素/N/である。また、促音/Q/は、小書きの「ッ」で表記される閉塞音であり、切手(ki-t-te)、河童(ka-p-pa)、咄嗟(to-s-sa)のように、異なる音声を表す記号である。促音のローマ字表記は、撥音が音声として異なる音として発音されても、ローマ字では一様に「n」と表記される（[m]の場合は「ム」と書かれることもある）ことと対照的である⁽⁸⁾。/R/は長音記号「ー」で示される音である。標準日本語には子音と母音の音素の組みあわせで作れる音の数も少なく、音節文字での表音がさほど難しくないといえる。

表音文字としての仮名は五十音表という括り方に第2の特色がある。五十音の起源には、梵語・梵字に関する研究である悉曇学（各段、各行の並べ方）と、漢字の音を示すための表音法である反切（子音と母音との組みあわせ）によるなど諸説ある。五十音表は、母音の段（ア段からオ段の5段）と子音の行（頭子音を伴わないア行を含め、ア行からワ行までの10行）から編成される。子音の行を、例えばカ行と呼んでk行とは呼ばず、また呼べないため、子音文字が先天的・本来的に「a」の音価を伴うサンسكريットのアルファベットの影響により⁽⁹⁾、ア段の音で表現する。

しかし、音素あるいは音節の体系性を表した五十音表に含まれる音の数は50ではない。撥音「ん」が別枠で掲載されており（促音「っ」は掲載されない）、ヤ行やワ行では欠落ないしア行との同形があることを措いても、他の音素が認められている。ただ、ガ行などの濁音行やバ行の半濁音行は、辞書などでは「清音・濁音・半濁音」という清濁の組みあわせ（必ずしも無声音と有声音との組みあわせとは限らない）として掲載されている（掲載順序は、例えば、以下ika→伊賀iga→沓岐iki→意義igiであって、ika→iki→iga→igiではない）ことからわかるように、異なる音素でありながらも1つのまとまりとして考えられている。手紙（te + kami）がte-gamiとなる連濁現象もこれと関連しているだろう。また、キャなどの拗音は、小書き（捨て仮名）の「ヤ、ユ、ヨ」を付けて別表として掲載される。拗音や促音の小書きは当初外来語に用いられ、戦後現代仮名遣いで「従来原則として大書きにすることが慣行になつていところ、『現代仮名遣い』において『なるべく小書きにする』ものとされていることにもかんがみ、当局における取扱いを別紙のとおりとすることに決定しました」として正式に規定された⁽¹⁰⁾。小書きが今なお一部で嫌われる理由は想像するより無いが、世代の問題、見た目の不統一感、文字が小さいための見づらさなどとともに、マス目に文字を埋めるという習慣の影響がありそうである。なお、詳細は不明であるが、撥音が小書きされる例があった⁽¹¹⁾。また、敗戦直後の漢字廃止・削減論の文脈で、助詞や動詞の活用語尾を小

書きにする案もあった⁽¹²⁾。意味合いは異なっても、小書きの活用が選択肢でありつづけたことはわかる。

このように、五十音表に含まれない表音を合わせると、その総数は100以上となっている。一般に書き言葉は話し言葉よりも変化しにくいいため、新しい音韻と表音とのズレは常態となる。このズレに関し、仮名は表音ではなく、表記を定めているのだから、表記重視を当然視する立場もあれば、仮名は表音文字であるから、表音にそって表記にその都度工夫を施すべきだという考え方もある。現代では、新しい音を表す場合には、五十音を基本とし、それに小書き文字や記号を用いて表す手法が採られている。例えば、標準日本語にない [f] 音はフィで表すと定められる。この場合、「フィ」は表記を定めているとはいい難いだろう。換言すれば、ここに和語はひらがなで表記重視、外来語はカタカナで表音重視という棲み分けが生まれる一因がある。

仮名が音節文字であることと日本語の特性との関連が第3の特色である。日本語は、音節言語 (syllable-counting language) とモーラ言語 (mora-counting language) の二分法では、モーラ言語に分類される⁽¹³⁾。モーラ (拍) とは一定の時間の長さをもつ音節の単位である。「もともと西洋古典詩において音節の長さを測る単位として使われた用語であり、日本語のモーラもこれと基本的に同じ意味で用いられている」⁽¹⁴⁾。1文字1拍が原則だが、小書きはその前の文字と併せて1拍とされる。促音は長子音の前半部分を、撥音は音節の末尾の鼻音などを、長音は長母音の後半部分を独立させて、各々1拍として数えられる。従って、「ちく (地区)」、「ちゃく (着)」は2拍で、「チャック」、「チャンス」、「チャーム」は3拍である⁽¹⁵⁾。近年音節とモーラとが二者択一であるという議論は見直されはじめ、アクセントの位置の決定での音節の重要性が指摘されている⁽¹⁶⁾が、モーラが基本単位であることには変わらない。ただ、秋田県など東北北部や鹿児島県など九州南部の外輪方言がシラビーム方言 (促音・撥音・長音をアクセントの単位として数えず、音節を単位とする) である

ことから、モーラ言語は標準日本語の性質であることも付記しておく必要がある。

3. 仮名による表記問題は、日本語の位置づけと関連する。国語審議会の議論は安田敏明の著作副題を用いれば、「迷走の60年」である。その議論の特色は、近代国家建設にあたり、国語創出をその国家の歴史・文化などをあらわすものにする方向（「歴史派」）と国家の領域内で遍く（地域的にも階層的にも）通用するものにする方向（現在派）⁽¹⁷⁾との相補・対立と要約できるのだろうが、「国語」としての日本語と「日本語」としての日本語との間の揺れとも表現できそうである。国語学会が2004年に日本語学会に改称⁽¹⁸⁾したことは広く話題となった。多くの国には「国語」かそれに準ずる言語が設定されているから、「国語」という普通名詞が「日本語」という固有名詞を指す了解は日本に限られる。ただ、この改名理由が学会名の普遍性や通用性を高めることにのみあるとは部外者にも思えない。

両者の違いは、第1に対象者の違いである。国語は、日本人には教科科目名として馴染みがある。国語学科は大学では文学部にあり、日本語学科は通例外国語学部設置されている。「国語」は主に日本語を母語とする者の第1言語であり、「日本語」は主に非日本語話者の外国語を指すだろう。しかし、両者の違いは対象者にとどまらない。大阪大学のHP⁽¹⁹⁾によれば、「国語学は、国語の音韻、文字・表記、文法、語彙などについて、上代から近・現代にわたり、通時的・共時的に研究する。[中略]『日本語学』が現代語を主な対象とするのに対し、『国語学』では、通時的研究に重点を置き、時代と[ママ]遡った文献に見える国語を主な対象とする」とあることから、志向の違いも大きい。敷衍すれば、「国語」が歴史や伝統を踏まえた国民国家創出の重要課題としての国語政策という意味合いを含む点で、歴史や文化を志向しながらも、政治色が濃いことも重要だろう。一方で、同大学の日本語学の紹介⁽²⁰⁾では、「これまで日本文化の研究では、

日本の固有性や特異性がことさら探究されてきた。しかし、それは近代日本が西洋を自覚するプロセスのなかで“美しい日本”“伝統の日本”といった形で構築してきた想像の所産ではなかったろうか。日本という地域の歴史や文化、思想を孤立した特殊なもの、あるいは自明なものとするのではなく、一国史・単一文化の枠を突破し、異質な文化との相互交流・摩擦のコンテクストを踏まえた比較や、フィールドワークに依拠して研究する視角が求められている」と、かなりの意気込みある（政治）表明がなされており、「一国日本語主義」、「一国家一国語」、「一民族一国語」への批判が読み取れ、日本語を国際的な文脈に位置づけ、一旦相対化した後に固有・独自の価値を見出すべきであることが強調されている。

この二分法が妥当するとすれば、仮名遣いのあり方が国の言語政策で論じられている場合には、「国語」の側面が表面に出る。一般向けの和英辞典の多くが、国語を、(Japanese) national languageではなく、Japanese, Japanese languageと英訳してきた・いるのは、この文脈では正しくない。「国語」と「日本語」の使い分け・併存が仮名遣いの問題にも反映しており、国語政策の文脈で「日本語」教育が議論されている。この「国語主義」と「日本語主義」の2つの方針の競合は、仮名遣いのあり方を定める意味、ひらがなとカタカナの役割分担の明確化のみならず、音声（音韻）重視か音素重視かという日本語のローマ字表記の不統一（複数の方式の併存）にも反映する。

4. かなづかいは本来正書法であるが、現行の仮名遣いは厳格な意味での正書法とは云えない。もちろん、正書法の理解は様々である。正書法が語表記の規則であるとすれば、その規則には一定程度の体系性や一貫性が求められる。現代仮名遣いにも規則はあるが、例外が多く、正書法の体をなしていないという印象は強い。文部科学省によると、表音の本則（原則）と準則（特例）を設け、仮名遣いの「よりどころ」となるものを示している⁽²¹⁾。ただ、例えば、本文第1（原則に基づくきまり）2の拗音の「や

ゆよ」や同4の促音は、「なるべく小書きにする」という程の緩さである。助詞の「を、は、へ」は、表音主義を採らない歴史的仮名遣への配慮（歴史的仮名遣いととの対照表が付されているが、違いを強調するものではない）から、維持される。「表記法は音ではなく、語に従ふ」べき（福田恆存）⁽²²⁾ということだろう。歴史的仮名遣は古代語音に基づく（この場合の古代語音自体が論点である）ことから、この表意主義あるいは表語主義を改めて表音主義を志向した「改良現代かなづかいでは準則で認めていた「学校『え』行きました」は認めないと変更された。完全な表音式の表記ではないが、それでも（あるいはそれが故に）正書法であるということだろう。正書法という言葉の定義次第だが、本則と準則とを分けていても、これほど数多くの特例を認めると、例外のない規則はないとか、例外・逸脱は通則の存在を示すという格言も当てはまらない。またその規則も拘束力を持つものではなく、「よりどころ」として位置づけられている。「よりどころ」の意味が分かりにくい、苦肉の表現である。ただ、漢語表記の漢字や和語表記のひらがなに比べ、外来語表記のカタカナに関しては、縛りが大きいという特色がある。この文字用途での区別は「国語主義」の新しい特色だろう。外来語表記には伝統配慮の必要が小さいからだろう。

準則を広く認める表記の揺れ、あるいは原則の弛緩具合を現代仮名遣いの正書法としての欠点とみなすか、表音重視や慣用尊重など複数の原則の妥協と見做すか、「国語主義」と「日本語主義」という原則選択の際の柔軟な態度と見なすかはひとまず措く。そもそも正書法は国が厳格に定めるべきものなのか、市場動向に十分な配慮をすべきものなのか、その際に専門家を含め、個人や団体の好み・志向を認めるのかなども、かなづかいの規則制定に関わる国語政策の硬軟が問われる問題である。現代的仮名遣いは、現代かなづかいに較べ、歴史志向であり、国語主義的であるが、同時に一般国民や専門家の慣用を重視する姿勢は維持されている。

5. 日本語は、漢字、ひらがな、カタカナ、ローマ字という4種類の文字体系を用いて表現される（digraphia）。用途別の一応の棲み分けはあるとしても、和語由来の動詞を漢字とひらがなのいずれで書くのか、外来語の表記はどの程度の国語化を基準にひらがなとカタカナのいずれを充てるのか、擬態語はひらがなで、擬音語はカタカナで表記するという新聞用字のルールをどこまで国語政策に組み込むのかなど文字選択の問題は多い。一方で、文字体系の意味合いの違いを前提に、同じ言葉を漢字、ひらがな、カタカナ、ローマ字で書いてもよく、その場合、異なった意味合いを持つ例は日常に溢れている。煙草とたばことタバコとTabako（街中でみるtobaccoは英語）では、意味（Sinn）は同じで単なる表記の揺れ⁽²³⁾に過ぎないのではなく、指示内容（Bedeutung）が異なることは常識に属する。また、「kirakira」は擬音ではないから、星は「きらきら」輝くが擬態表現として正解で、「キラキラ」輝くは不正解だと言われても、星の輝き表現として「キラキラ」と書きたくなる場合があるだろう。

ただ、1つの外来語に対して複数の表記を認める場合、いくつかの不便がある。テキストかテクストか、ギリシアかギリシャかなどでは意味上の混乱はない。表記選択は好みの問題である。個人としての趣味であり、また専門家と一般人との違いであるが、人気作家の意図的使用なら個人の趣味を超えたメッセージとなる。指示内容上の誤解が生じなければ、複数の表記容認は柔軟路線である。過度のルール化は規制が自己目的化する嫌いがある。これに対し、指示内容上の混乱が生じる場合がある。この場合、誰のどのような利便を優先するのかという問題に帰着する。明治時代以降に限っても、多数の外国語が次々と流入した結果、「国語」の乱れが懸念され、乱れ解消に向けた「対策」が続き、それが「政策」と表象されてきた。その際、「日本語」という視点で考えれば、学習者にとっては厄介ではあっても、「乱れ」という発想は弱まる。外来語の適切な例が浮かばなかったため、少し前に話題となった「ら抜き」を例にとると、この使用には違和感が消えづらいが、可能表現と尊敬表現とを区別できる利点が

あり、表現の明確化という点で合理的な「乱れ」である⁽²⁴⁾。後述するように、表音表記一致を原則とするカタカナによる外来語表記にも、音節文字や五十音の枠を守ろうとする「国語主義」の維持が前提となりうる。その例が、「たばこ」か「タバコ」、「てんぷら」か「テンプラ」かである。この場合は「国語に取り入れた時代が古く、国語に融合しきっていて、外国語に由来する感じが余り残っていないもの」、つまり、十分に「国語化」していると見做され、「たばこ」や「てんぷら」とひらがなで表記される。ひらがなで書かれれば、外来語の「出世」である⁽²⁵⁾。

6. かなづかいの改定に見られる傾向は、語用や慣用の重視である。その一例が近年明記された外来語の長音記号（ユーザーなどの「ー」）の規則だろう。ただ、長音の表現に関する一般規則は余りにも複雑である。カタカナとひらがなでの表記原則の区別が基本とはなっている。「かあさん」を「かーさん」と書かない理由は、ひらがなとカタカナが各々表す言葉の性質の違いである。ただ、「かあさん」の「あ」は前の「か」の母音部分の長音を表す記号であると考えれば、これも一種の長音記号とみなすという判断は可能である。同じ母音 2 つ続けて長音を表す方法は、フィンランド語などに見られる（長母音は、ii, ee, uu, yy, oo, öö, ää, aaのように、短母音字を 2 つ続けて表す）からである⁽²⁶⁾。しかし、ここでも面倒な説明が続く。お列の長音は、「おとうさん」のように「う」を添えるから「かあさん」とは異なる。呼びかけの言葉（感動詞）である「ooi」は、「おうい」ではなく、「おーい」と書く理由がわかりづらい。「おうい（王位）」は合成語だから「ou-i」なのか（ローマ字表記風に、「おう'い」と書くのも奇異なのだろう）、「多い」は、何故「おうい」ではなく、「おおい」なのか（歴史的仮名遣のハ行転呼音「ほ」でのオ列長音は、「お」を添える。この場合は長音ではないとも解釈できそうである）、結局の処、「お」の長音には 3 つの表記を認めているなど、品詞の分類や元の音韻、合成語（分節）などの語源・語義を考えねばならず、使い分けづらい。え列長音は、従来

「え」を添えるとの規則が変更され、「とけい（時計）」「えいが（映画）」などのように「い」を添えることとなった。但し、「ねえさん」のような場合は旧本則のままでよいとして、ここでも規則がわかりづらい。い列長音の規則はさらに複雑である。表音主義と表語主義の中途半端な折衷は混乱をもたらすだけだとの非難も納得できる。

これに対し、カタカナによる外来語の表記原則は固い。まだしも外来語は表音と表記とを一致させることが原則とするからである。しかし、この場合の表音の意味が不明確である。例えば、英語「pet」のような1音節の場合には、[e]音が通常より長く発音されるが、短母音であるから長音記号を用いず、むしろ通常ベットと促音を用いて後の子音を長くして表現されるが、長めの短母音を長子音で表すという手法である。「最近では、Hitler「ヒットラー」、Friedrich「フリードリッヒ」に代わって「ヒトラー」、「フリードリヒ」というカナ表記が増えている。「バッハ」として定着している作曲家Bach[bax]を「バハ」とすることには抵抗がある。ただし、1890年10月発行の『音楽雑誌』第2号に掲載された日本における最初期のバッハの紹介記事の題名は、「セバスチャンバハ氏伝」だった。日本として辞書登録の対象となる「カナ表記」には、慣例への配慮が必要だが、外国語辞書の「カナ発音」は発音記号に代わる補助手段であり、原語の発音に沿った表記が望ましい⁽²⁷⁾。「抵抗がある」ことは理解できる。語感に従っているなら自然だが、その語感も初期規定による経路依存の産物である可能性は残る。イタリア語のように二重子音（長子音）が多い場合に、二重子音への対応としての促音使用には謙抑的な意見が少なくない。「よく飲むカップッチーノだって最初の『ッ』の方が気持ち軽しい、カッフエッラッテと字数に忠実に書くとかえってなんのこともかわかりにくしい、結局、カフェラッテと書いて日本語的に読んだ方が全体のバランスとしてもオリジナルに近い」⁽²⁸⁾。原音重視より日本人の耳馴染みや発音のしやすさが優先されるのは自然である。文部科学省「外来語の表記（答申）（抄）」国語審議会（1991年2月7日）⁽²⁹⁾の表現を借りれば、外来

語は、国語の構造に合わせて、発音や語形、意味用法に変化が生じ、「国語化」するのが普通である。

長母音表記のための長音記号使用にはいくつかの弊害はあるように思える。まず、外来語の語末の長音については（ここでも例外を広く認めているとしても）決まりがある⁽³⁰⁾。英単語の語末の -er, -or, -ar, -y は原則長音記号で書くとする（ケア、ストア、ウェアのように、語尾の母音の直前に強勢のある別の母音がある単語は例外とする）。様々な分野で、「コンピューター」ではなく、「コンピュータ」と表記されていた理由は色々あっただろう。容量等の技術的問題から空白の節約という事情もあり、表記を短くできる利点があった。冗長を嫌うというある種の美意識が働いていたのかも知れない。しかし、語末長音での長音記号使用は今世紀に入り、広く受け入れられ始めている。「JTF 日本語標準スタイルガイド（翻訳用）」⁽³¹⁾では、12の基本ルールの5としてカタカナ語の語尾の長音は省略しないとする。『外来語（カタカナ）表記ガイドライン 第2版』（テクニカルコミュニケーション協会、2008年3月）は、音声対応にふさわしい表記（読み上げたときに日本語として聞き取れる、聞き間違いがないこと）を目指し、業界や製品分類の枠を越えた大きな標準化の波が押し寄せている中で、メモリーとメモリ（目盛）のように、視覚障害者が聞いた時に同じものと認識できない場合があり⁽³²⁾、また、長音付きのカタカナ用語の方に馴染みを感じている利用者が多いという製品利用者への調査結果（2003年9月実施）を根拠としている。しかし、英単語の場合、発音上重要なのは強勢がおかれる位置である。

日本人は、東日本や九州では子音を、西日本では母音を強く読む傾向があるとしても、長母音を強く読む（2拍なので長く読む）傾向があるために、また仮名はアクセントを表記しない（こととした）文字であるため、語末に長音記号を記すと、語末に強勢をおく誘因となる。例えば、原音に近いとして、actorをアクターと、memberをメンバーと表記すると、強勢が「tor」や「ber」に置かれかねない。実際に、若者などは「アクタア」

や「メンバア」とでも表記したくなる言葉を日常で用いている。この語末の長音記号使用は、語末の [ɑ] (米語) の長短に関する問題ではない⁽³³⁾。従って、この「弊害」を防ぐためには、アクタ、メンバと表記する方がいい。もちろん、actor も member も日本語として取り入れているのだから、むしろ日本人の語感に近い発音にする方が望ましいという判断はある。この問題は日本語の二拍子・四拍子好きとも関係しているかも知れない⁽³⁴⁾。actor は「芥」ではなく、member も「面罵」ではないのだから、アクター、メンバーと表記すべきかもしれないが、「芥」も「面罵」もカタカナ表記されず、また音声だけとってもアクセントなどが異なるから混乱しないという反論はある。それに、原語色や原語臭が残る英語由来の外来語の場合、英語学習の点で彼我の発音の差を縮める利点がある。

第 2 は、二重母音と長母音との表記上の区別の問題である。英語の場合、[ou] や [ei] は二重母音 (diphthong) であって、[ɔ:] や [e:] とは区別される。cold [kould] と called [kɔ:ld] (米語) は区別され、また face は [fers] であって [fe:s] でない (いわゆる母音大推移 (Great Vowel Shift) により「feet」のように [e:] が [i:] へと変化しているから [fe:s] のような [e:] という音価を持つ単語は通常の英単語には見当たりにくい)。日本語には二重母音を 1 拍で発音する習慣がない。二重母音の表記は重要だが、連母音で表音すると 2 拍で間延びする。[ou] を含む外来語は、長母音で表記する例が多い。home [houm (米語)] はホームと表記・発音される。従って音節の数は措き、二重母音であることを示すために、ひらがなでの長音表記を準用して「ホウム」とすることは考えられるが、オ列の長音を「ウ」で表す規則があるためにホウムと書いてもホームと発音されかねない。そこでさらなる工夫が必要となる。また、[ei] の場合も、ひらがなでのエ列の長音表記が「えい」と変更されたため、同様の問題がある (バレエ、ミイラ、エイト、ペイント、レイアウトなどでは慣用が尊重される)。従来「デーサービス」だった表記が「デイサービス」となっている看板を近年見かけるが、day [dei] を「デー」ではな

く、「デイ」と表記して二重母音であることを示しても、長母音として発音される。ただ、JRのような用語では、西南方言などや特定の年代を除き⁽³⁵⁾、「ジェイ」と書いても「ジェー」と読む人が多い⁽³⁶⁾との指摘もある。ひらがなの「おう」や「えい」は長母音を表し、カタカナの（「オー」や「エー」に代わる）「オウ」や「エイ」は二重母音（連母音）を表すという規則は煩瑣でしかない。平成5年11月に文部大臣から諮問された「新しい時代に応じた国語施策の在り方について」のうち、「国際社会への対応に関すること」について、「国際社会に対応する日本語の在り方」として国語審議会が答申している（平成12年12月8日）⁽³⁷⁾が、その中でも、国際化に伴うその他の日本語の問題として、外国人の日本語理解の障害となる（外国人にとって片仮名語は分かりにくい）ことが挙げられており、その意味でも二重母音の表記の工夫は一考の価値がある。

7. 音節文字及び五十音という枠組みからいくつかの不便が生じている。音節文字による不便で知られている例が動詞の活用形の説明である。日本語の動詞には、その語幹が子音で終わるもの（子音幹）と母音で終わるもの（母音幹）とがある（古語や方言の「混交型」は措く）。日本語は膠着語だから、屈折語に比べ⁽³⁸⁾、語幹（活用や曲用しても変化しない部分）と活用語尾の区別が本来容易なはずである。動詞を語幹と活用語尾とで区別すると、下一段活用では表記上も区別できる。「食べ、食べ、食べる、食べる、食べれ、食べろ／食べよ」では、語幹は「食べ」とわかる。これに対し、五段活用動詞の場合、例えば、「行か／行こ、行き・行っ、行く、行く、行け、行け」で、一見変化しない部分である「行」が語幹のように見えるが、その後の部分が活用語尾ではないことから、語幹と活用語尾との区別が付けづらい。語幹は、「行」でなく、「行k」だからである。日本語教育文法は、子音で終わる語幹を認めるために説明は容易だが、「国語」教育が依拠する学校文法では、悩みの種である。学校文法は仮名単位で分析・説明するために、語幹の有無の判断が難しくなる。その結果、上一段

活用、下一段活用、カ行変格活用、サ行変格活用などは語幹が存在しないと説明される。例えば、「見る」の語幹を「み」としてしまうと、未然形と連用形は活用語尾が無くなるため、語幹がなく、活用語尾が「み」、「み」と説明する。従って、語幹がある動詞と語幹がない動詞に区別するなど、複雑な説明をせざるを得ず、動詞の活用を示すためにはローマ字による表記が便利だが、学校文法（「国語」教育）では音節文字のまま説明しようとするため、説明が一貫しない。世代によるだろうが、少なからぬ人が小中学校の国語文法の授業に悩まされた所以である⁽³⁹⁾。

仮名文字使用の第2の不便は、外来語の表記の際に生じる。日本語の単語は、語末が「ん」で終わるもの、促音で終わるものを除き、開音節である。従って、英語のpetはペット（petto）とせざるを得ず、「t」が「と（to）」に置き換えられ、ペットという1音節の単語が日本語では2音節になる。しかも、日本語はモーラ言語という特色を有するから、petという1音節の単語は、「ペ」「ッ」「ト」の3拍で発音されて相当間延びする。もちろん、この間延びも国語化の結果であり、味わいであるという評価もありうるが、間延びは間延びであり、petとペットでは発音に要する時間が違いすぎる。

第3の不便は、方言表記に表れる。方言表記の問題に入る前に、方言をめぐる問題を整理しておく。方言（dialect）⁽⁴⁰⁾は、ある言語の中で、音韻や文法、語彙の点で特色を有する下位言語（体系）を指し、一般には地域毎の特色を持つものを呼ぶが、これ以外にも社会階層やエスノ・民族に特有なもの（sociolect, ethnolect）も指すことがある。言語（標準語）と方言では、一般に言語間距離がその区別の基準となり、その基準の代表候補である相互理解可能性（mutual intelligibility）の程度が低ければ、2つの言葉は別言語であり、その程度が一定以上高い場合には方言の関係にあるという区別はわかりやすい。もちろん、東京方言話者と津軽方言話者の相互理解は相当に困難であるが、両者を「取り持つ」方言が存在していることから、相互理解可能性という点での連続性がある（continuumにあ

る）ため、津軽方言は津軽語とは看做されない。しかし、この相互理解可能性という基準も実際の言語分類には役立たないことが少なくない。その代表例が北ゲルマン語群に属するスカンジナビア諸国の言語であり、相互理解度が高いスウェーデン語、デンマーク語、ノルウェー語（(bokmål「書籍語」と nynorsk「新ノルウェー語」）は異なる言語として認知されている。同種の事情は、（低地）ドイツ語とオランダ語⁽⁴¹⁾などにも当てはまる。こうした事例の場合、似ているからこそ、国家主導で文字や文法あるいは語彙で差異化を図ることも多い。このように、相互理解可能性は言語関係か方言関係かの峻別基準としては不十分である。言語は陸海軍を持った方言である（Max Weinreich）というのは、言語が国家と結びついていることを指している。言語と方言との分別は政治的である。さらに先の表現をもじれば、1つの言語の中で「標準語は威光（prestige）をもった方言である」。方言から言語への、さらには公用語への「格上げ」要求は、文化的自律性の主張に留まらず、地域の政治的自治・独立の議論へとつながりやすい。これを日本語の文脈に当てはめると、琉球諸島で話される言葉は、本土の日本語と相互理解可能性が低く、両者の間を取り持つ言葉がないが、政治的統一の要求を背景に日本語の琉球方言として分類するのか、それとも相互理解可能性が低いこと、さらには政治的独立期間が長かった歴史などを考慮して、琉球語（琉球諸語）として「独立」させ、日本語と琉球語が日本語族を構成すると考えるのかの相違となる。

かな表記は標準日本語のための表記であり、方言の表記法の開発は相当に遅れている。方言を扱う議論は多いが、方言独自の音価の表記開発を問う議論は多くない。その中で、琉球方言は、琉球大学など複数の団体が正書法を作成している点で際立っている。方言を重視しない「国語」の視点があるいは標準語志向の強さが表記問題に看取れるが、それと同時に日本語（本土方言と琉球方言）は方言が豊かである⁽⁴²⁾事情が表記問題の難しさに関係している。例えば、方言の豊かさは音韻の面にも現れている。『方言学入門』⁽⁴³⁾には11の方言の母音体系が紹介されている。母音

の数がアイウエオの5音でない例として、母音の数が3（沖縄与那国方言）、4（三宅島坪田方言）、6（盛岡市方言、奄美喜界島羽里方言他）、7（新潟県西蒲原郡坂井輪村方言、奄美徳之島亀津方言他）、8（名古屋市方言）が紹介されている。母音が一番多い名古屋市方言には、ドイツ語のUウムラウト「ü」やOウムラウト「ö」に似た音があり、英語のcatの[æ]に似た音もある。もしそれぞれに独自の文字が作られていれば、ゲートも原音に近い表記が可能であり、米語のhat [hæt] と hot [hat] も区別できるだろう。また、11の方言のうち、5つの母音を持つものとして4つの方言が挙げられているが、同じ母音数でも音価が異なる。京都市方言の母音体系が典型的な三角形であるのに対し、東京方言は「a」が「e」や「o」と同様の半広・半狭音で体系は四角形となっている。茨城県結城郡三妻村方言や新潟県津川町方言は、「i」と「u」がそれぞれ前舌め、後舌めになった台形である。また、沖縄名護町城方言も母音体系は東京方言のように四角形であるが、いくつかの母音が相当に異なる位置にある（紹介されている図をそのまま解釈すれば、「a」は半広・半狭音で後舌母音、「o」は狭音、「u」は中舌母音）。従って、この11の方言の母音体系に示されている母音の数は、舌の位置関係による違い（京都市方言と東京方言の「a」）を考えなくとも、「a」[i] [u] [e] [o] に [ë] [ĩ] [ö] [û] [æ] [ɛ] [ɔ] を加えて（少なくとも）12ある⁽⁴⁴⁾。相当に豊かである。

子音についても方言は豊かである。その代表例がいわゆる四つ仮名・四音問題（じ、ず、ぢ、づ）である。1946年「現代かなづかい」への批判から、現代仮名遣いでは、四つ仮名は語源通りに書き分けることをやめ、基本的には実際の発音に合わせて「じ、ず」と書くことが基本とされた。従って、4つの文字は発音上「じ=ぢ≠ず=づ」の二つ仮名に収斂される。もちろん、ここでも鼻血（はな「ぢ」）、縮む（ち「ぢ」む）、続く（つ「づ」く）などの例外が設けられ、語源への配慮は残されている。しかし、方言には、一つ仮名「じ=ぢ=ず=づ」（雲伯方言他）、三つ仮名「じ=ぢ≠ず≠づ」（大分県国東半島）、四つ仮名「じ≠ぢ≠ず≠づ」（九州南部他）な

どがあり、音声と音素のレベルの違いはあるとしても、少なくともこれら4文字の発音に対して10以上の異なる音声がある。「ぢ、づ」を原則「じ、ず」と書く（二つ仮名）規則は、発音に即してわかりやすいが、語源がわかりづらくなることとともに、方言に厳しい方針である。この他にも五十音には存在しない子音が方言にはある。例えば、宮古方言には「v音」がある。しかも、「v音」は単独で1拍となれるという特色を持つから音素としても「一人前」である。

表記数が表音数よりも多い事例、すなわち、異なる音声さらには音素を同じ文字で表わしている場合には、混乱が生じる。例えば、鼻濁音 [ŋ] である。この場合、東北方言のように、単に [g] と音声上異なっているが、ガ行として理解される、つまり音素上の問題が存在しないものはそのままでもいい。しかし、標準語と関連する（伝統的な）東京方言では、ガ行子音音素 /g/ で、語頭等の非鼻濁音 [g] と対立して、語頭等以外の場合に [ŋ] として現れることから、音素上の違いがある。この点を強調するために、しばしば新しい文字（「か」の半濁音）が作られ、表記されることがある。さらに、方言の中には、鹿児島地方（薩隅方言）など閉音節の単語を多く有するものもある。当該方言の場合は、開音節で表記しても閉音で終わるとの約束事を設ければいいが、表記上の区別ができない不便はある。

もちろん、「国語」の視点からは方言への配慮は必ずしも重要ではない。通常の表記を行い、標準日本語から逸れた音声には注釈をつければ済む。しかし、上述したアイウエオ以外の母音、独立した [v] 音などは放置されたままであり、日本語が豊かな音価を有する点を見失わせる。標準日本語の表記で方言は表記できないという事実だけでも、「地方の時代」にそぐわないとすれば、従来表記できなかったものを表記できるように文字体系を工夫することも必要だろう。その際、音声として独立していることと、そのための文字を開発することとは必ずしも一致しない点には注意を要する。異なる音声でも独立した音素でなければ、注釈をつけた方が統一

感を確保できるからである。

8. 以上の「不便」解消には、仮名文字の刷新も 1 つの選択であると考えられる。その際にひらがなとカタカナでは表記規則が違うため、カタカナ表記の工夫を主に考察する。工夫の試みは現代仮名遣いでも見られる。例えば、1991 年 6 月 28 日の内閣告示第二号「外来語の表記」⁽⁴⁵⁾ では、外来語の表記に用いる仮名と符号の表として、表 1 と表 2 とが挙げられ、第 1 表には、外来語や外国の地名・人名を書き表すのに一般的に用いる仮名が、第 2 表には、外来語や外国の地名・人名を原音や原つづりになるべく近く書き表そうとする場合に用いる仮名が、挙げられており、第 1 表・第 2 表に示すカタカナでは書き表せないような、特別な音の書き表し方については、ここでは取決めを行わず、自由とする、としている。そして、第 1 表には、「シエ、チェ、ツァ、ツエ、ツォ、テイ、ファ、フィ、フェ、フォ、ジェ、ディ、デュ」が、第 2 表には、「イエ、ウィ、ウエ、ウォ、クァ、クイ、クエ、クォ、ツイ、トゥ、グァ、ドウ、ヴァ、ヴィ、ヴ、ヴェ、ヴォ、テュ、フュ、ヴェ」が示されている。また、取決めを行わず、自由とすることとした例として、「スイ、ズイ、グイ、グエ、グォ、キエ、ニエ、ヒエ、フヨ、ヴヨ」が挙げられている。

この 2 文字の組みあわせの仕方には複数の規則が混じり合っている。五十音が本来持っていた音の欠落を補うスイ、ズイ、テイ・トゥ、ディ・ドウ、イエ、ウィ・ウエ・ウォもあれば、異音を基に新しい行を創ろうとするツァ・ツイ・ツエ・ツォのツァ [c] 音行、外来語表記のための新しい行を認めようとするヴァ・ヴィ・ヴ・ヴェ・ヴォヴ [v] 音行、クァ・クイ・クエ・クォのクァ [qw] 音行、グァ・グイ・グエ・グォのグァ [gw] 音行、ファ・フィ・フェ・フォ (「フ」が表す [F] 行を英語などの [f] 行に準用)、その他の個別対応がある。カタカナの表音が使い分けられていることに気付く。「ツ」が [tu] ではなく、[cu] を表しているために、本来の [tu] を「トゥ」とオ段+小書きのウで表現して対応してい

る（カタカナなので、トゥがトの長音にはならない）。「フュ」や「ヴェ」がウ段＋小書きのユと表記されるが、「ツ」が[c]音なので、「チュ」となる。「シェ」「ジェ」「チェ」なども同様であり、この場合には、最初のカタカナが子音のみを表すことが了解されている点が重要だろう。つまり、最初の部分のカタカナはここでは音節文字ではなく、子音を表す音素文字として使われている。ここに外来語表記で挙げられた例を用いると、相当の融通が利くことは確かである。上述の「外来語の表記」の第1表は正書法風であり、第2表はそのうちの原音尊重を意識した規則であり、その他は慣用重視の規則なき規則である。ただ、相当の気配りがあるこの規則群でもなお、上述した外来語や方言の表記には充分とはいえないのも事実である。ここに新たな工夫の余地がある。

まず、外来語に類出し、また一部の方言に登場する母音を伴わない音（閉鎖音）表記の開発がある⁽⁴⁶⁾。この点で参考になるのはアイヌ語仮名である⁽⁴⁷⁾。アイヌ語仮名はアイヌ語の特性に対応して開発されたと考えられている。アイヌ語は、日本語と異なり、多種多様の閉音節で終わる単語を多く持つ。しかも、アイヌ語の語末の子音は、舌などがその音価を出す位置に置かれるだけで（後に母音が来なければ）発音されない（英語のcan'tの語末のtが破裂しない破裂音であることと似ている。促音とも少し近い）。従って、発音されない性質は別として、後に母音が来ない子音の表記は、「ん」や「っ」を除いて仮名表記できないため、「クシストヌハヒフヘホムラルルレロ」の小書きカタカナと「ゼツドブ」の半濁音が開発された。「クシストヌハヒフヘホムラルルレロゼツドブ」である。この21の文字とアイヌ語の子音の数とは合わないが、それはここでは考えない⁽⁴⁸⁾。また、日本語母語話者が発音する場合、どうしても母音を添えてしまうため、「ラルルレロ」という文字が作られ、例えば、小書きの「ラ」は、前の音がア段の母音でその後に[r]音が発音されることを表すが、実際には5つの小書きを用意することで母音がついているような印象を与えて、誤解を招く⁽⁴⁹⁾から、例えば、小書きの「ル」で[r]音を表すか、

あるいは「ル」の半濁音などをつくってみるのも1つの方法である。ともあれ、このようなアイヌ語仮名の発想を利用すれば、例えば、英語に由来するpetは「ペット」ではなく、「ペド」と表記できる。この「ド」がシラビーム方言のように、単独ではモーラを形成しないと決めれば(実際に、促音や撥音とは異なり、拗音の小書き仮名である「ゃ、ゅ、ょ」は単独ではモーラを構成しない)、このペドという表記は1拍となつて、1音節のpetと3拍のペットとの発音に要する時間の乖離を解消できる。

この小書きの活用領域は他にもある。音便の発生史を見てもわかるように、漢語導入時は後ろに母音を伴わない子音をそのまま発音していた。この種の問題でしばしば例示される菊は「kik」であり⁽⁵⁰⁾、その後発音しづらさから「kik」は「kiku」となつたとされる。このように開音節で終わる単語が多い中で、現代日本語では、「学校に行きます」の最後の「す」は[su]([stu])というよりは[s]に近い。「すき(好き)」の「す」も同じである([suki]ではなく、[ski])。これは母音の無声化と呼ばれる。「い」や「う」が無声子音に挟まれたときや文末にあるときに母音が聞こえにくくなる現象であり、カ行音・サ行音・タ行音・ハ行音・バ行音の子音が無声子音する。東日本や九州の方言にこの傾向がみられるとされる。この種の音韻変化を含む表記法が開発されれば、あるいは外来語について原音に近い発音に違和感がなくなれば、テストは「テスト」のように「スト」を半角表記するか、「テスト」のように小書きにして表記することが考えられる。この利用対象は多い。

すでに活用されているア段の小書きにも一層の活用が期待できる。上述したように、英語の二重母音を日本語では長母音のように表記する例が多い。長母音との違いを明示するために、homeを「ホーム」ではなく、「ホウム」と表記することで対応可能であるが、ひらがなの場合は、「ほうむ」は「お」の長音だが、カタカナの場合は当てはまらない規則が混乱しやすいなら、「ホウム」という表記の導入が一案となる。「ホウム」は2拍となり、さらに上述のアイヌ語仮名由来の小書きを用いて「ホウム」とすれ

ば1拍として表記できる。また、「デー」や「デイ」を「ディ」と表記すれば、こちらも1拍であることを示せる。このような小書きの使用は二重母音に見えるという視覚効果もありそうである。また、アポイントメントを「アポイントメント」と表記することで、小書きの部分に強勢がないことを示せるという利点もある。語頭に小書きが来る違和感も慣れの問題でもある。「食べない」とか「食べたい」の「ない」や「たい」は、「た+い」と2拍で明瞭に発音する場合もあるが、「ない」や「たい」のように1拍（二重母音）のように発音している時もある（英語のamやareにある発音の弱形 [(ə)m]・[ə] と強形 [æm] [æ] の区分だと弱形に当たるだろう）。ただ、小書きのアイウエオを用いる場合、半ば認知されている「ディクス」の「ディ」などとの混乱は生じる。「ディ」が [di] なのか [dei] なのかが分からなくなるからである。「ティ」や「トゥ」などこの種の調整が厄介な課題として残り、それへの対応策として「ディ」などに関して新たな表記の開発が望ましいかどうかは利用コストの問題である。しかし、混乱を招かない事例での導入は検討の価値があると思える⁽⁵¹⁾。

おそらく最も開発が望まれるのは、日本語ではイ段（強勢のない英語の単語ではア段）で表現されることが多い（ア「ニ」メーション、イング「ラ」ンド）いわゆる曖昧母音（中舌中央母音）[ə] (schwa) の表記である。上述の11の方言の母音体系にもこの曖昧母音は見られないが、末尾がア段やエ段で終わる場合、曖昧に発音されていることも多く、また方言への適用を考えなくとも、外来語の原語に多い曖昧母音の表記を用意しておくことは、英語などの外国語習得にも大いに助けとなる。

また、文部科学省の「外来語の表記」で第2表の水準にある「ヴァ、ヴィ、ヴ、ヴェ、ヴォ」（これに対応するひらがなはない）を「ヴ」（ウ濁）行」として認知し、宮古方言の「v音」の表記に充てて（閉鎖音であるから、小書きにするなどの工夫は必要となる）、その上で外来語の[v]音表記に充てるという方法も考えられる。なにしろ、外来語には[v]音が非常に多い。これに関しては、次のような意見がある。「お断りをひとつ。

本書では、ロマンス語固有名詞の日本語カタカナ表記として、『ヴェルレーヌ』『ヴァレリー』のような『ヴ』ではなく、『ベルレーヌ』『バレリー』のように、『バ行』音を用いている。現今では、原語のラテン文字表記がvを用いている場合に、『ヴ』のカタカナ表記が一般的に使用されているが、それを表すじっさいの日本語音は『バ行』の場合と同じ[b]であって、[v]音に対応しているわけではない。他の場合には表音性をもつカタカナ表記が、この場合にのみ表音性を失ってしまっているのは、合理性を追求する言語学に携わっている著者にとってはまことに不合理なことであって、『ヴ』の使用はつまらぬペダンティズムとしか思えない。したがって、特別の場合を除いては、著者は『ヴ』の文字は使用しないことを原則としている」(町田健)⁽⁵²⁾。ご専門領域に含まれると思われるスペイン語では、「v」音表記で「b」音発音である。このスペイン語のアルファベットの表音性喪失は、歴史的仮名遣いのように歴史的経緯を保存している点で重要だろうが、合理的でないから[b]音表記にすべきだとなるのか、フランス語に多い黙字は削除すべきとなるのか、外国の事例はここでは関係なく、外来語表記に用いられるカタカナ表記には表音性を求めるが、表記主義・表語主義のひらがなの場合は話が別ということなのか不明だが、表記を原音にいくら近づけても、原音のように発音しないのだから、表音性を重視する点で無意味であるというのはもったものである。専門家風を吹かせるのは見苦しいというのも同感である。しかし、周知のように「合理性」の意味は多様であり、ここで基準となる「合理性」が何を指すのか門外漢には不明であることは措き、発音の区別をしないのだから、「バ行」音で書いても「ヴ(行)」音を用いても同じように発音するならば、「ヴ」と書いて原語の発音が異なっていることを示すことにも意味がある。文脈や事例は異なるが、原語ではどう書くのかということを知りたい人もいるし、知っておいた方がいい(天野祐吉)⁽⁵³⁾という意見もあるから、その教育効果を考えると、「ヴ」を用いることは「つまらぬペダンティズム」とは限らない。

9. 五十音表は従来から「五十音」以外の音素を表現するために、濁音などの記号を用いたり、拗音の場合、小書き仮名を利用して、様々な音の表記を可能としてきた。この方針を拡張すれば、表音記号としてのカタカナの可能性は高まる。これと関連して、放送用語委員会に面白い議論があった⁽⁵⁴⁾。事務局の発言として、クワについては、沖縄方言の表記をどうするかという問題もからんでくるとある。その後で、方言で扱われている名詞をどう書くかという問題は、共通語の範囲で扱う問題なのか、外来語として扱う問題なのかまったく決まっていなとする。方言を外来語扱いするという発想が放送関係者の間にあること、その発想が方針の選択肢の1つであること、その発想が躊躇無く語られていることが注目される。方言は国語ではなく、外国語であり、方言を外来語という形で「同化（国語化）」させるという信念すら看取できる。このような認識への評価は措いて（もはや削除不可である）、方言の表記に現行のカタカナ表記のルールを応用すれば、表音文字としてのカタカナの開発は方言が有する独自の音価の表記にも役立つ。

それぞれの文字には当然ながら長短がある。仮名も同様である。日本語の音素の数が少ないから、あるいは日本人が自然に弁別できる音声の数が少ないから、そもそも原音尊重は、原音の再現ではなく、原音に近づけるか、原音表記を開発する姿勢を意味する。その際、日本人の自然な音声体系にあった（国語化された）音声の表記を優先するのか、馴染みの無かった音声を取り込む方向で新たな表記を開発するか、方針の選択が問われる。慣れ親しみを考えれば、手持ちの文字と記号で代用することは、外国語が日本語風の外来語として受容する点でも望ましい。馴染みの無い音価が日本語に混じる不快感を味わうぐらいなら、原音から離れても慣れ親しんだ音価で話したり、聴いたりする方が、一般国民に支持されやすいことは確かである。

一方で、外国語の国語化あるいは方言の標準語化を進める方向ではな

く、標準日本語にはない音価が存在することを表記上も明示することにも意味がある。方言との関係で、標準語は、言語のあり方の規範を示すだけでなく、その威信が方言を圧倒する「ご威光」にまで高まるのを防ぐには、方言の表記問題への一層の検討が重要だろう。その場合に、従来の五十音表を基礎に、符号や小書き文字などを用いる表記の方が慣れやすく、負担も少ない。ひらがなの表記原則とカタカナの表記原則との関係を再検討することも将来の課題だが、「学校『へ』行きました」を認めるならば、「ヴァ」イオリンと書くことも認める余地はある。もとより表記の統一を求めることは利便と同時に弊害を生む。画期的な改革は字義通り前代未聞であり、これまで開発を図った先人の苦労には頭が下がるが、ありがた迷惑という場合もあるだろう。ただ、外来語や方言の表記で、従来の表記法に不足があるとすれば、支障との調整を図りながら少し大胆な変更を考えてもいいように思える。

大胆な試みはすでに身近にある。通常は存在しないとされる音も、漫画の世界ではよく出会う。表現手段として音声が使えない漫画だからこそ、文字で多くの表現が工夫される。例えば、「え」に濁音をつけた表記は、明らかに「え」ではなく、喉を絞ったような（声門の緊張を伴った）「え」なのだろう。この表音・表記に、音声学・意味論上、どのような特色があるのかはわからないが、これは単に感情を表すものでもなく、視覚効果を狙っただけでもない。「えー」では驚きなのか同意なのかわかりづらい。「え濁音ー」は、おそらく否定的な驚きや戸惑いの感情表現であり、気分が出ている。このような例は他にも数多くあるだろう。様々な試行があたらしい音を創り出している。日本語表現で重要な役割を果たしているオノマトペも一層豊かになり得る。このように考えると、音節文字という縛りを少し緩めれば、カタカナの可能性は相当大きくなる。このような表記の開発は、「日本語」にとっては「乱れ」ではない。仮名の表記の種類と数が少々増えることにも大きな不便はない。文字の多さは漢字で慣れている。

国語政策と呼ぶに値する一定以上の体系性を有する政策を持つことが望ましいかどうかは判断が難しい。仮名遣いに関する方針の変更を見る限り、政策というよりは対策が進められてきたといえる。現場や市場での混乱回避には、表記と表音との一対一対応が求められ、その意味で部分改良を重ねる対策方針の方が望ましいとも云えるからである。かなづかいで緩やかな表記原則を採る現状は、政策としては未熟かも知れないが、対策としては相応に評価できる。例えば、ローマ字表記は複数存在し、ヘボン式（旧ヘボン式、修正ヘボン式）、日本式、訓令式などが用途などに応じて用いられている。省庁間ですら、表記は統一されていない⁽⁵⁵⁾。この融通無碍が混乱をもたらしているのも事実だが、臨機応変の態度である。そうであれば、かなづかいに関しても、国語政策に「日本語」という視点を採用することで、仮名表記の可能性を拓ける試みを認めてもいいという観点が今後重要となるように思われる。

10. 近代国家の建設と国民国家の創出とは内容を異にする政治課題であり、主要先進国の歴史をみれば、両者の時期がずれることも多い。日本の場合、両者がほぼ同時期に重大な課題となった事情があり、統治制度の整備と国民創出の施策とが混淆し、混同されやすい。国語問題もこの文脈におかれる⁽⁵⁶⁾。国語が国民を作るのはフランス革命以降の常識となった。フランス語がフランスを作ったのであって、その逆では無い。あるべき国家像や国民像に関する理念の提示は一貫した、しばしば集権的な国語政策の提起と実施を求める。その最大の課題は標準語の確定と普及である。その際、国民創出の重点を歴史・文化あるいは（発明・発見される）伝統に置くか、現状の地域・階層間にある差異や格差の縮小に置くかで国語問題への対応は変わる。歴史派と現在派の競合、標準語と方言との序列による中央地方関係の整序⁽⁵⁷⁾、効率あるいは画一と慣用あるいは多様との比重、表語主義と表音主義の選択など、いずれも対応方針の模索の基準であり、産物である。国内外の状況の変化にともない、言語使用が多様化し、豊か

になれば、言語の管理が深刻な政策課題に位置づけられる。異質を生む多様性は必ずしも脅威ではないが、「国語」という視点に執着すると、日本語の乱れを生む言語市場を制御し、「二義的な存在として位置づけられる」外来語や方言という異質な存在への配慮もおざりになる⁽⁵⁸⁾。明治時代以降の近代国家建設や国民国家創出は現在では緊急課題ではなくなっている（はずである）。歴史文化あるいは伝統の尊重が重要であることは議論の前提としても、グローバリズムという不明瞭な言葉が横行する中で、法律などによる厳格な規定で国語の再生・純化を図る国家主義的方向ではなく、過度の効率性や合理性を求めるのではなく、人の心と深く関わる言語の使用状況をみながら、一応の本則を定め、慣用や好みに配慮する方針で個別事案への対応経験の蓄積を主旨とする方針は評価できるからである。それにおぞなりの対応にも利点はある。現場を知る対策が理念に走る政策に優る場合が少なくない。そして国語問題では、外来語や方言の表記問題を手がかりにして、音節文字である仮名文字の新たな活用法を開発し、その汎用性を高めることは、日本語が持つ豊かな表現を再認識し、統治手段としての標準語中心主義、「国語」主義の過度の進行を制御する一策となるように思われる。

脚註

- (1) 本研究ノートは、新潟大学での政治学Ⅰ～Ⅳ、西欧政治史Ⅰ・Ⅱ、Introduction to Japanese Politics、(留学生向け)日本事情社会系などの講義ノート・プリントが基となっている。講義内容との関連が分かりづらかったかも知れず、個人の趣味の問題にも思えるテーマに付き合わされた学生たちに改めてお詫びする。
- (2) 両者の区分及び表記に関しては、壇辻正剛「音声学と音韻論」宮地裕他編『講座日本語と日本語教育 第11巻言語学要説(上)』(明治学院、1989年) 21頁
- (3) 佐藤喜代治「正書法の歴史的背景 一江戸期まで」大修館書店月刊『言語』編集部編『『言語』セレクション 第3巻』(大修館書店、2012年) 103頁

- (4) 日本語の母音の数に関しては様々な議論がある。参照、清瀬義三郎則府「日本語の母音組織と古代音価推定」『言語研究』（96巻、1989年）23-42頁、Bjarke Frellesvig and John Whitman, *The Vowels of Proto-Japanese, Japanese Language and Literature* (38 (2), 2004) pp.281-299
- (5) 各行の子音が異音を含み、または異なる音素が生まれている（音韻化）点に関しては、参照、大和シゲミ「外来語音の定着と非定着」大阪樟蔭女子大学日本語研究センター [編]『日本語研究センター報告』（12号、2004年3月）31-40頁
- (6) 例えば、ア行が韓国語風にゼロ子音 [ϕ] ['] の行だと考える議論に従えば、ゼロ子音を独立した音素と見做すことになる。言語学上の便宜がなければ、無の認定は相当に哲学的である。
- (7) 山田敏弘『あの歌詞は、なぜ心に残るのか』（祥伝社新書）54頁以下
- (8) 促音のローマ字表記では、「あっ」が難しい。/Q/ は音声表記には使えないから、「at」か「att」が無難な候補となるのだろう。
- (9) 菅沼晃『新・サンスクリットの基礎 [上]』（平河出版社、1986年）14-16頁
- (10) 「法令における拗音及び促音に用いる「や・ゆ・よ・つ」の表記について」（昭和63年7月20日内閣法制局総発第125号）
- (11) 紀田順一郎『日本語大博物館』（ちくま学芸文庫、2001年）94頁掲載の「山下芳太郎による最初のカナモジ試作 時事新報1914年」。なお、撥音が1拍なのは日本人には自然に思える。しかし、直前の母音と共に音節を形成するから「撥ねる」音と称されるならば、1拍としない方が自然にも思える。音の自然感覚も生理学上の問題である以上に、社会関係の中で作られたものだろう。なお、古典ギリシャ語での撥音、促音のモーラに関して、金田一春彦『NHK大学講座 日本語の特質』（日本放送出版協会、1980年）40頁に、Platonは、Pla-to-nで3拍とあるが、わかりづらい。原語は Πλάτων だから、Pla-too-nなら日本語の促音の扱いと似るが、Pla-to-on (ωを2つのoに分ける) なら無関係に思える。
- (12) 安田敏朗『国語審議会 迷走の60年』（講談社現代新書、2007年）43-44頁
- (13) Blaine ERICKSON, *Old Japanese and Proto-Japonic Word Structure, Perspectives on the Origins of the Japanese Language*, vol.31 (2003) p.495では、上代日本語はシラブル、後にモーラになったと指摘されている。なお、古代ギリシャ語などでは、音節の長短が音の物理的な長さのみならず、位置により（当該音節の母音の後に複数の連続する子音が来る場合は長音節）決まるため、その上で長短音節が定義されることを考えると、長母音＝2拍とする日本語の発想との齟齬があるように思えるが、今後の課題とした

い。

- (14) 窪園晴夫「モーラと音節の普遍性」『音声研究』(第2巻第1号、1998年4月) 6頁。なお、同書9頁の言い間違いの例の紹介で、「鉄筋コンクリート→コッキンテンクリート」が挙げられている。地域差や時代差があるのだろうが、「鉄筋コンクリート→テッコンキンクリート」も多いだろう。
- (15) グリコ遊び(ゲーでの勝利(グリコ)、チョコキでの勝利(チョコレート)、パーでの勝利(パイナップル))で、順に3拍、5拍、6拍なのに、3歩、6歩、6歩進めるのは拍を基準としていない。記号を含めた文字数が基準なのだろう。
- (16) 撥音や促音、長音、二重母音の後半部分という4つの要素は、独立したモーラを形成しながらも、独立した音節を形成しない。英語でも日本語でもアクセントの位置決定のための距離を測る単位はモーラであり、決定されたアクセント付与を受けて、アクセントの最終的な落ち着き場所(担い手)となるのが音節という単位である(窪園晴夫「モーラと音節の普遍性」『音声研究』(第2巻第1号、1998年4月) 5-15頁)。併せて、津熊良政「日本語、英語、中国語における単語レベルプロソディ特徴の言語間比較研究概観 A Cross-linguistic phonetic Overview of Word Prosody in Japanese, English and Chinese」『立命館法学 別冊「ことばとそのひろがり」山口幸二教授退職記念論集』(4号、2006年3月) 特に250頁以下、藤川直也「日本語東京方言におけるモーラ・音節・フット Morae, Syllables and Feet in Tokyo Japanese Phonology」『ありあけ：熊本大学言語学論集』(12号) 79-112頁。窪園晴夫「川上夔『日本語アクセント論集』」『国語学』(186集、1996年) 55-62頁は、書評を通じて論点が整理され、学界動向もわかるので、前掲論文と同様、門外漢にも問題の所在がわかりやすい。
- (17) 安田敏朗『国語審議会 迷走の60年』(講談社現代新書、2007年) 13頁以下他。同書は新書という形での一般国民に向けた問題提起の書であるが、特に後半部分は啓蒙より糾弾が目立つ。
- (18) 日本語学会HP (<https://www.jpling.gr.jp/>) (2019年11月24日閲覧)
- (19) <https://www.let.osaka-u.ac.jp/ja/academics/graduate-course/g-kokugo> (2019年11月24日閲覧)
- (20) <https://www.let.osaka-u.ac.jp/ja/academics/graduate-course/g-nihongaku> (2019年11月24日閲覧)
- (21) http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/k19860701001/k19860701001.html
- (22) 福田恆存『私の国語教室』(文春文庫、2002年) 55頁
- (23) 小椋秀樹「大規模コーパスを活用した外来語表記のゆれの調査」『立命館文学』(630号、2013年3月) 823-831頁

- (24) 崎山理『日本語「形成」論 日本語史における系統と混合』（三省堂、2017年）46頁以下の説明がわかりやすい。
- (25) 文部科学省「外来語の表記（答申）国語審議会（1991年2月7日）」
- (26) オランダ語やスウェーデン語のように、母音の長短をその後に来る子音の数で示すのも、長音表記といえる。
- (27) 清水誠『ゲルマン語入門』（三省堂、2012年）183頁
- (28) 岡本太郎『みんなイタリア語で話していた』（晶文社、2001年）130-133頁
- (29) http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19910207001/t19910207001.html
- (30) 小椋秀樹「外来語語末長音の表記のゆれについて（第百号記念号）」『論究日本文学』（100号、2014年5月）195-208頁
- (31) 一般社団法人日本翻訳連盟（JTF）翻訳品質委員会 第3.0版2019年8月20日（https://www.jtf.jp/jp/style_guide/pdf/jtf_style_guide.pdf）
- (32) 「四年生と四年制」、「秋田県と秋田犬」、「試験官と試験管」、「新分野と新聞屋」、「新新党と新進党」（参照、窪園晴夫『アクセントの法則』（岩波書店、2006年）66頁）が区別されるように、メモリと目盛はアクセントで区別できるから、代表例としては不適切だろう。なお、標準語と関西弁とはアクセントの意味が違う点については、参照、山下好孝『関西弁講義』（講談社選書メチエ、2004年）
- (33) マイクロソフト社は外来語カタカナ用語末尾の長音表記を変更している（2008年7月25日発表）が、その「カタカナ用語末尾の長音表記に関する標準ルール変更への賛同」の中で、森治郎は、ユーザーという表記が英語発音への誤解に基づく「長音符号省略」原則の決定に端を発しているとしていて、日本語全体がおかしくなろうとしているとしている（<https://raitu.tumblr.com/post/43679191/> 富士ゼロックス株式会社様）（2019年11月25日閲覧）。ただ当該箇所には誤解の理由説明がないため、推定するよりないが、例えばuser [ju:zə] の最後の母音 [ə] (hooked schwa) に関する認識の違いだろう。米語の「r」音の特性もあるが、尾子音が消えた時にその長さを補償する形で同じ音節の母音が長くなる代償延長（窪園晴夫「モーラと音節の普遍性」『音声研究』（第2巻第1号、1998年4月）9頁）を指しているようにも思える。
- (34) 参照、別宮貞徳『日本語のリズム 四拍子文化論』（ちくま学芸文庫、2005年）。拍子の問題は、外来語の略語にもあるのだろうが、何故コンビニのような4拍省略とマクドのような3拍省略とがあるのかの使い分けの原則がわかりづらい。ただ、3拍省略の場合も、マク・ドのように2拍＋1拍で表音している。4拍と2拍とは受け取り方の差に過ぎないなら、マク

ドは3拍ではない点が重要なだろう(同書142頁以下)。また、一部の専門書や報道機関が、コスタリカを「コスタ・リカ(Costa Rica)」ではなく、「コス・タリカ(又はコス・タリ・カ)」、プエルトリコを「プエル・リコ(Puerto Rico)」ではなく、「プエル・トリコ(又はプエ・ル・トリ・コ)」、ウラジオストク(ウラヂヴァストーク)を「ウラジ・オストク(Владивосток)」ではなく、「ウラジオ・スト(ッ)ク(又はウラ・ジオ・スト・(ック))」とするのも2拍子と関連しているように思える。

(35) 井上忠雄「外来語の表記と撥音の問題点 ―エイを中心に―」『明海日本語』(10・11合併号、2006年3月)14頁

(36) どちらで書いても同じように発音するとしても、表記への拘りは残る(小椋秀樹「外来語における[eɪ]の表記のゆれ」『第8回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』(2015年9月)76頁。同「現代における外来語表記のゆれ: 語末長音と[eɪ]の表記(特集 いま外来語を考える)」『日本語学』(35(7)、2016年7月)34-42頁。コミュニティーとコミュニティなど、普通名詞と固有名詞で表記が異なる現象は面白い(小椋秀樹「外来語語末長音のゆれについて」『第4回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』(2013年9月)247頁)、同「外来語語末長音の表記のゆれについて(第百号記念号)」『論究日本文学』(100、2014年5月)195-208頁

(37) http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t20001208003/t20001208003.html

(38) 屈折語の特色を失いつつある(孤立語化し始めている)英語の場合でも、sing, sang, sungのどの部分が語幹かはわかりづらい。規則変化動詞を見ると、膠着語的な側面があるようにも思える。孤立語、膠着語、屈折語という分類はその意味で相対的だろう。

(39) 送り仮名問題が難しい一因も、この音節文字による処理に起因しているように思えるが、送り仮名問題は難しく、その一部であっても考察対象としえなかった。今後の課題としたい。

(40) このような議論では、dialectはむしろ言葉や言語と訳した方がいい。

(41) 参照、B.C.ドナルドソン『オランダ語誌』石川光庸・河崎靖記(現代書館、1999年)

(42) 参照、工藤真由美・八亀裕美『複数の日本語』(講談社選書メチエ、2008年)

(43) 木部暢子他編著『方言学入門』(三省堂、2014年)22頁以下

(44) 宮古方言の[i]は非円唇の狭い中舌母音であるが、この音は標準日本語のイに対応しているから、音素として独立していても、2種類のイ段を設ける必要があるかどうかは別の問題ではある。この点で、いくつかの方言で「カ」と「クワ」を使い分けている事例とは異なる。

- (45) http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/k19910628002/k19910628002.html
- (46) L音にラ行の半濁音を宛てる場合もある（今岡十一郎『ハンガリー語四週間』（大学書林）。L音とR音の区別をするために、L音をカタカナで、R音をひらがなで表記する工夫もある（野口誠『聖書ギリシャ語入門（いのちのことば社、1990年改訂新版）』）。仮名交じり文があってもいいなら、両仮名交じり文があってもいいともいえるが、語の種類によって文字を選択するという基本方針に拘れば違和感があるだろう。さらに、野口誠・野口良哉共著『聖書ヘブル語四週間』（いのちのことば社、2012年）では、「ヘイト（ヘット）」の音をひらがなの小書きの「は」、最短母音をカタカナの小書きで表すなどの工夫がある。日本語にない子音が多いために、ひらがなとカタカナによる区別を多用する例もある（岡崎正孝『基礎ペルシア語』（大学書林、1996年））。ただ、両仮名交じり文はここでは考察しない。
- (47) 池澤夏樹編『日本文学全集30 日本語のために』（河出書房新社、2016年）6. アイヌ語（213-238頁）のうち、「アイヌ神謡集」などにその表記が見られる。
- (48) アイヌ仮名では、「ン、ム、ヌ」を書き分けているが、アイヌ語に多いリエゾンでは仮名表記では対応しづらいという問題もある。
- (49) 知里真志保『アイヌ語入門 とくに地名研究者のために』（北海道出版企画センター、1985年復刻）151頁
- (50) 藤堂明保編『学研漢和大辞典』（学研研究社、2001年）によれば、菊の中古音（漢語）は [kiuk] である。
- (51) 小書きを2つ続けることは一般に望ましくないなら、show「ショウ」などは認められないが、これも慣れの問題かも知れない。
- (52) 町田健『ロマンス語入門』（三省堂、2011年）はじめに。
- (53) 放送用語委員会（東京）「外来語の発音・表記について ～『NHKことばのハンドブック第2版』『外国語 外来語のカナ表記』細則書き換え案～」『放送研究と調査』2013年5月）91頁
- (54) 放送用語委員会「外来語の発音・表記について ～『NHKことばのハンドブック第2版 外国語 外来語の仮名表記』細則書き換え案』『放送研究と調査』（2013年5月）89頁
- (55) 参照、井上忠雄「外来語の表記と撥音の問題点 ―エイを中心に―」『明海日本語』（10・11合併号、2006年3月）15頁以下
- (56) 国民創出の手段として、国語（標準語）の整備の他にも、国旗や国歌、国花など国家象徴、国民象徴の制定がある。また音楽や芸術も国民統合に活用される（参照、渡辺裕『歌う国民』（中公新書、2010年）、兵藤裕己『〈声〉の国民国家』（講談社学術文庫、2009年））

- (57) 公の場で方言や地域言語を用いると何らかの処罰が下される事例は、日本（各地の方言札）、イギリス（Welsh Not）、フランス（Vergonha）など各国に見られる。沖縄の例として、読売新聞戦争責任検証委員会『検証 戦争責任下』（中公文庫、2009年）155頁以下
- (58) 小林隆「国語学」と「日本語学」：方言研究からみた「国語学」「日本語学」『國語學』（53（2）、2002-04）97頁